

私がたどった満州開拓

岩手県 伊藤 静 夫

一 夢のまた夢

私の父、沼津 健は明治三十五（一九〇二）年四月五日生まれでしたが、母むめよの反対を押し切り、満州第一次武装移民に参加して、昭和七（一九三二）年秋、満州に渡った。昭和初期の不景気の中で、沼津家の三男として実家の宮城県遠田郡小牛田町下小牛田屋敷で、「ただ飯を食う」ことのつらさに耐えかねて自ら志願して行ったのだが、軍歴の陸軍工兵軍曹として止むに止まれぬ決断だったようだ。もちろん、軍歴優秀、志操堅固な在郷軍人という応募条件があったが、すべてを満たしていたし、何よりの魅力は二十町歩の地主になれるという誘いに心ひかれ、応募資格の「二、三男で、二年から三年の間は実家から生活経費の仕送り可能な家の子弟」という条件も満たしてい

たからであった。

昭和七年十月、東京から神戸港へ、それから船で満州の大連に上陸し、鉄道で奉天（瀋陽）に至り、ここで完全武装をして、ハルビンから松花江を船で下り佳木斯に到着した。治安が悪いため、ひと冬の間、桂木斯市街の警備に当たったのち、翌年二月、「王道楽土」「五族協和」という大きな目標を掲げ、山崎団長以下百五十人の先遣隊員として、永豊鎮に入植した。夢と希望を抱いて「蘭の花咲く満州へ」と入植した武装移民隊は、度重なる抗日匪の襲撃を受け、多くの犠牲者を出した。父沼津健と同志の青森県人の高木静二氏は、山で木材を伐採する仕事を担当し、共同家屋、物置、倉庫、畜舎等々を完成し、寒さの厳しい中越冬の準備を完了した。

こうして本格的に開拓事業に入る段階を迎えたが、治安は相変わらず悪く、銃を片手の農作業も思うように進まず、食事は粗食、娯楽もほとんど無く、「屯懇病」にかかる者が続出して、多くの阻

害事項に希望を失い退団する者が後を絶たなかった、と後に父から聞いていた。このような事情の武装移民隊を立て直すために、昭和九年ころから家族招致が進められ、「大陸の花嫁」と称されて進んで日本の国のため渡満する女性がたくさん出てきた。多くの困難を乗り越え、開拓民のもとへ嫁ぐ女性の力こそ偉大なものと言えるだろう。

そのような世情の中で、私は昭和十一年一月、満州国三江省樺川県弥栄村永豊鎮で生まれた。当時、父が団本部の土木班に勤務していたため、宮城屯を出て孟家崗モシヤガシに住んでいた。子供のころ、満人が町中を売り歩く「タンホーロ」という赤いなつめ実の回りに飴をぬったお菓子と、横約十五センチメートル、縦十センチメートルぐらいの長方形の形をした板状の茶色の飴を、金槌でとんとんとたたいて小さく割った飴を好んで食べていたが、おいしかったことを思い出す。

昭和十七年四月、弥栄在満国民学校へ入学した。そのころには宮城屯へ戻っていたので、最初は寄

宿舎に入ったが、夜中便所に起きるのがつらかったことと、寝る前に「軍人勅諭」の一節を大声で「言わされるのには困った。先輩たちから「よーし！」と言われるまで、何回も暗誦させられた。

一、軍人は忠節を尽くすを本分とすへし

一、軍人は礼儀を正しくすへし

一、軍人は武勇を尚ふへし

一、軍人は信義を重んずへし

一、軍人は質素を旨とすへし

と、一字一句間違ひなく言えるをやつと布団の中に入れた。国民学校の低学年でも、このように礼儀正しい生活であった。そのうちに寄宿舎を出て、宮城屯から通学することになった。冬場は父が馬そりで送迎してくれたので、寒さの厳しい中でも楽しく勉強をすることができた。冬の楽しみは、樽に水を入れ、その中に「みかん」を入れておくとその周りに氷が張り、冷えきった「みかん」をストープのそばで食べる。あのおいしさは忘れられない。ホームスパンの糸で編んでもらったセ

―ターを着て、綿入れの国防色の上下をまとった服装も、今では懐かしい思い出である。

それに加えて、自慢したことは「教育勅語」の全文や歴代の天皇陛下の名を丸暗記したことだった。さらに、音楽の時間には「シロジニアカク、ヒノマルソメテ」とか「二宮金次郎の歌」などを好んで歌っていたが、三、四年生のころになると軍歌ばかり歌うようになった。

また、私が女の先生に反抗して石炭を投げつけたときに、担任の先生から「ビンタ」を十発ほどもらったが、一発ごとに左右に倒れるくらいに殴られて、しまいには小便を漏らしたのも知らずに立っていたこともあった。分らない者には、たいていでも分からせるといふ教育方針が徹底していたように思われてならない。終戦三日前の八月十二日、国民学校四年生の夏休みのときに、弥栄村から引き揚げることになるまでの国民学校は、あらゆる場と機会をとらえ、徹底した軍国主義教育そのもので、「大きくなったら強い兵隊になっ

て、天皇陛下のため、御国のために死ぬ」と本気に考えるようになっていた。

弥栄村を離れるまでの十年の間、みんなが意気揚々と力強く歌ってきた歌に「満州開拓の歌」というのがある。

歌詞を記述したい。

それは次のような内容であり、私は今でもよくおぼえている

一、大陸色に 焼きつけた

五体がうちり 先駆者の

誇りに燃えて 陽があがる

ひろい舞台だ この朝だ

やるぞどこまで 根がぎり

二、花嫁部隊 今日はずや

モンペりりしい のら支度

駒よいななけ 雲千里

骨を埋める 覚悟なりや

住めば都よ 北の空

三、日満むすぶ 日の丸と

五色の旗を 組み立てて

門もうららな 村景色

銃と氣負った 開拓の

戦士われらが 氣は弾む

四、せまい天地で あがくより

胸もすくよな 大平原

拓く男子の ころ意氣

見ろよ日毎に 伸びてゆく

第二の祖国 わが樂土

この歌も、今でも口ずさむと当時のことが思い出されて、感無量なものがある。

私の家では満人三家族を雇い、農耕馬や乳牛の飼育、羊の放牧などの仕事をしてもらったが、その人たちは本当に真面目で陰日向なく働いて良心的な人たちだったなあと、今は懐かしく思い出される。弥栄村から避難する十日ぐらい前のこと、「ジャングイ、ジャングイ。リーベンワンラマー

(ご主人さま、日本はもう終わりのようですよ)

と父に囁いてくれたことを聞いて、立場は違っても、相互の信頼に支えられた人間同士の触れ合いから生まれた行動ではなかったのかと思うと胸が熱くなってくる。このことは、私の一生の宝物としている。終戦に近いころには、理想の開拓農村の生産活動に励み、生活も豊かになっていた。農産品、畜産品の生産、そしてこれを加工する施設を建設し、日本の国のために創意工夫を凝らして出荷していた。もちろん、多くの満人・鮮人などの協力を得ての生産活動であったことは言うまでもない。

二 敗戦三日前

八月十二日午前二時ころ、父は村公所で開かれていた緊急会議から帰るなり、「引揚命令が出された。明日朝六時までに、弥栄駅へ集合しなければならぬ。すぐ準備しろ！」と言い残すと、激しい雨の中を約三十戸の宮城屯内の人々へ知らせに走った。このときの宮城屯の成人男子は、病人

同様の人がたった二人しかいなかった。母は貴重品や当座の食糧と衣類など、最小限必要なものをまとめてリュックサックに詰めていたが、その間に使用人の満人たちに馬車の準備をしてもらって、父の戻りを待っていた。

父が戻って来ると、母は「引揚命令が出されたのでは、もう日本は駄目なんだね。最後なら最後らしく、家を全部焼いて引き揚げませんか？……その方が……！」と興奮して言ったが、父は「いや、そんなことはない。日本は絶対に負けはしない！」と全然相手にせず、さっさと荷物の点検をして満人に別れを告げ、馬車を出発させた。

あちらこちらから、たくさんの馬車が荷物と人乗せて駅に向かって行つたが、遠くで鳴く家畜の声が馬車に伝わるのと、馬のいななきとがこだまとなって、寂しく響きわたっていた。昨夜の雨は止んだが、まだ今にも降り出しそうな重苦しい空だった。途中長い沈黙が続き、これから先が不安になり心配してか、だれも何も言わない。弥栄

在満国民学校の前を通るときには、つい数日前までの学校生活を思い出し、静かに別れを告げた。あの懐かしいレンガ造りの校舎、寄宿舎、そして友と駆け回った校庭、東屋などなど！これが最後になるのか、と思いつながら通り過ぎた。

弥栄駅に着くと、周りは村民でいっぱいになっていて、なぜか、みんなは「必勝」と書かれた鉢巻きをして、小銃や日本刀、中にはピストルを持っている人もいて、さながら戦場に赴くように意気盛んな雰囲気になっていた。駅では工藤儀三郎村長を中心にして代表者会議が開かれていて、各屯からの集結状況の報告、確認が行われた。

ところが、待てども待てども列車が来ない。徹夜で準備して朝六時ごろから集まっていた人たちは不安になり、「何で汽車が来ないんだ！ 私たちは捨てられたのか！」と不満を口に出しはじめ、子供たちの泣き叫ぶ声や話し声で駅前は騒然とした状況となった。昼になつても汽車は来ないので、午後二時ころに、母たちは近くの鉄道官舎へ夕食

の握り飯を作りに出向いたところ、もうその官舎は満人や鮮人たちによって家財道具を略奪され、家の中は見るも無惨に荒らされていたとのことだった。その官舎の奥さんは、「もうみんな持つて行かれました。今日が最後ですから、せめて新しい布団で横になってから出発しようと思ひましてね……」と、寂しそうに話していたのが今も忘れられない。これとは対照的に我が家の満人たちは、家にあつた鶏卵と近所の家から集めた鶏卵を「ゆで卵」にして百個ほど麻袋に詰め、馬を走らせ持つて来てくれたのには、さすがの父も緊張がほぐれ、互いに手を取り合つて喜んでいたのが、強く印象に残っている。

午後六時ごろ、ようやく列車が到着したが、屋根がない無蓋貨車だった。人の背丈ぐらゐに回りを板で囲んだ石炭などを運ぶ貨車だった。各屯ごとにまとまるように割り当てられた貨車に乗り込んだが、リュックサックの上に幼子に乗せた母親が、子供の手を引きながら必死で場所を取つた。

組合倉庫や農建組合から運んだ板やシートも積み込んだ。西の空に太陽が沈むころになって、「弥栄万歳、弥栄万歳」の声を空に響かせながら、やつと出発することができた。

夜遅くなつて雨が降り出したので板やシートで覆いをするが、それでは防ぎきれず、そのうちに雨漏りで全身が濡れてしまった。貨車の中は、人の吐息と雨覆いでむんむんとする蒸し暑さだが、荷物と人とで身動きはできない。普通ならば、一時間半で行ける佳木斯駅に着いたのは、十時間も掛かつた翌朝の夜明けごろだった。佳木斯の街は黒煙が上がり、赤い炎もあちこちに見えた。軍が街を破壊したのだと、駅のホームにいた避難民の人たちが口々に叫んでいた。この異常な光景を見た母は、「やっぱり家を焼いてくれば良かったのに……」と悔しがつたが、父は「なーに、全部満人にくれてやつたんだと思えば良いじゃないか」と至極あつさり言つていたが、心の中では母と同じく悔しい思いがあつたのではないかと感じてい

た。

再び列車は動き出したが、雨はますますひどくなり、車内では赤ん坊の泣き声が響く。「水、水……」と泣き叫ぶ幼子たちもいた。数人の母親が、髪を振り乱して気が狂ったようにしてわめき声をあげた。弥栄病院の保健婦さんたちが、忙しく動き回り力づけている。次の日もまだ雨は降り止まず、とうとう十数人の乳飲み子が息を引き取ってしまった。この子たちの遺体は、非情にも走る列車から車外にそのまま捨てられていた。

三 綏化での避難生活

その日の午後三時ごろ、綏化という所に到着した。父母の話によると、しばらく戦況を見守るため一時滞留するのだという。駅から二キロメートルほど離れた、陸軍の飛行場の格納庫に落ち着くことになり、思い思いの荷物を背負い子供の手を引いて、長い列を作って疲れた体で歩いた。昨日までの雨降りとは打って変わって、夏の暑い太陽が照りつけ、着衣が異様な匂いを出しながら乾い

ていくのが分かった。飛行場の滑走路には、雨で濡れた衣服がいっぱい乾かされていたが、雨上がりの夕焼け空に無数の赤とんぼが飛んでいたのが鮮明に思い出される。

格納庫の中では、コンクリートの床の上にあちらこちらから集められた木材を並べ、その上に筵などを敷き、寝場所を作った。内部は広々としていて、幾つかに区切られ、一区切りに数百人が収容されていたようだった。このような格納庫が十棟ぐらいあって、北満の国境近くからの避難民を受け入れ、万を数える収容人員になっていたらしい。弥栄村の人たちは、屯ごとに一緒になって居場所を確保した。二、三日すると、私たちが弥栄から避難する直前に召集されていた人たちが、終戦と共に私たちの避難先を探して、次々と家族の元に戻って来た。女、子供だけの集団に男子が加わり、心強くなってきた。

綏化に着いて四日目だったと思うが、児童、生徒全員が滑走路に集められて体操をし、その後で

遊んでいたときだった。はるかかなたから、ものすごい音と土煙を上げながら進んでくる一団があった。よく見ると、ソ連の旗をなびかせて多くの武装兵を乗せたトラックが、私たちが生活している格納庫の方へ進んで行くではないか！「何が起こつたのだろうか！」と皆が口々に叫んでいたが「日本が戦争に負けたのだ……。神風日本が敗れたのだ……。」と私は直感的に思った。弥栄村を出たときから、日本の敗北が予測されるような戦況だったからだ。

果して、ソ連軍の高官らしい将校と通訳が本部に案内され、我が方の幹部との話し合いの後、「武装解除」が言い渡された。ソ連兵が自動小銃を構えて監視する中で、日本人が持っていた武器という武器はすべて集積され、トラックに積み込まれ、いずこにか持ち去られてしまった。本部からは「日本が無条件降伏をした」と伝えられた。八月十六日のことだったと記憶している。

次の日も、自動小銃を構えた兵士に守られて、

ソ連軍の高官と通訳が会談に来たが、彼らが私たちの前を通るときには、床に土下座をしなければならなかった。多分、降伏しましたという意味表示の行為なのだろうが、まことに惨めな思いだったことが忘れられない。

この綏化で約一カ月避難生活を過ごしたが、その中で幾つかの忘れられないことがある。その一つは、一部の満人と鮮人が「日本人を見たら皆殺せ！ 皆殺せ！」という意味の言葉を叫びながら襲って来たことである。幸い、召集を解除されて戻って来た人や義勇隊の若者たちがいて、無事に排除して何事もなかったが、こんな恐ろしい事件が何回かあった。二つ目は、綏化にたどり着くまでの数日間を雨に打たれた、抵抗力の弱い老人や子供たちが、風邪から肺炎を起こし、そのうえに食べることも十分にできず栄養失調が重なって、多くの犠牲者を出したことである。次から次に亡くなる人たちを弔うのに、避難民仲間の和尚さんが墓穴のそばに座りつきりだった姿や、毎夜、死

者を供養するローソクの火があちらこちらで揺らめいていたのが、今でも忘れられない。弥栄村の引揚げ記録によれば、この間に百四十八人が死亡したと記されているのも、うなずかれるところである。

慌ただしく弥栄村から避難して以来、毎日がその日暮らしの生活で、綏化に着くまでには携行していた当座の食糧も食べつくしていた。だがどこで調達したのか、赤い色をした高粱飯コウリヤンが配給された。敗戦を知ってからは、みんなは「もう住み慣れた弥栄に戻ることは不可能だろうと思い、これから先はどうなるのか……。果して日本に帰れるのだろうか……」など、そんな心配をしながらの一日一日だった。

綏化に来て一カ月、九月も半ばになると霜が降り始めて、格納庫の中でも寒さを身に染みて感じるようになってきた。ソ連軍司令部と引揚者の本部との交渉の結果、南方に移動することが許可された。南方とはどこなのか一切知らされず、ただ

父母の後ろについて行くだけだった。九月十五日、秋の良く晴れた暖かい日だった。いよいよ南を目指す旅の始まりである。今度は、無蓋貨車ではなく屋根の付いた貨物列車だったが、車内はいままでと同様ギョウギョウ詰めで、幼い子供たちはかわいそうだった。窮屈極まりない旅となったが、

我慢、我慢だった。用便は貨車の隅の方に石油缶を置き、恥ずかしい思いをしながら始末したのは致し方ないことだが、ただ水が無いのには苦労した。汽車が停まるたびに、扉を開けて水汲みに出ようとすると、ソ連軍の下級兵士、それに満人、鮮人が無理やりに侵入し、時計、貴重品、現金などを手当たり次第に略奪し、その上に若い女性を見つければ銃を突きつけて否応なしに連行するのだった。そのため、女性たちは髪を切り坊主頭になった上に、顔に鍋底のすずを塗ったりして男の姿になって、難を逃れる工夫をした。こんなことから、今度は扉を内側でロープ、針金で縛り、必要なときは外の様子を見てから男だけが水汲みに

行き、大小便は車内の小さな穴から用を足していた。こんな用心をしても、隙を見ては強引に略奪は続き、ほとんどの人の持ち物は姿を消してしまつた。

汽車が動き出すと、扉を開け新鮮な空気を吸つていたが、こんなことを繰り返しながら南下を続けた。次に困つたのは、大量の「虱」の発生だった。綏化での集団生活のときに既に発生していたが、ギユウギユウ詰め貨車の中では、所構わずに動き回り血を吸うのだった。一時間おきぐらいに着物を脱いでは調べると、必ずいた。イガグリ頭の上まで動き回るので、お互いに「虱」を取りっこし、見つけ次第潰したものだ。「虱」というやつは、人の血を吸つて栄養失調に至らしめたり、病気感染の媒介をしたりして、引揚者なら必ずつらい体験をさせられた厄介者だった。

南下は数日かかり、着いたのは新京(長春)で、ここで下車して駅前には並んでいると、突然に銃声があつた。中国共産八路軍と国民政府軍の市街戦だ

つた。こんな所で中国の内戦に巻き込まれてはかなわない、と考へた団幹部は、さらに南下を決意、そのまま貨車に再び乗り込んだ。ここからまた、列車の中の苦難の数日間を過ごすことになつた。やつと着いた所が大連で、綏化出發から十日もかかつた九月二十四日のことだつた。この十日間の避難行で、幼子を主として百人近い人が命を失つた。遺体は、列車が鉄橋に差し掛かると川に投げ込んで水葬にするか、あるいは途中停車のわずかな時間に線路横か駅のホームの傍らに埋葬した。しかし、山形屯、西弥栄屯の人たちは新京到着が遅れ、そのまま新京に残留してひと冬を過ごした。死者百人余の大きな犠牲を払つたが、祖国への引揚げは我々より一足早い昭和二十一年八月だつた。

四 大連での生活

大連駅には、秋も深まつた九月二十四日朝、下車した。前夜に到着したが、混乱を避けるため車内で一晚過ごし、夜が明けてから収容所の確認と出發準備を整えて、収容所に充てられた大連実業

学校に入所した。弥栄村を出てから、着の身着のまま、風呂にも入らないという一カ月半の生活で疲れ切った引揚者が、長い列を作って実業学校を目指して歩いた。この学校は、港に近い山の麓に建っている立派な建物で、鉄筋コンクリート三階建て、地下室には柔道場、一階と二階の間には体操場があった。

大連駅は初めてだったが、壮大なすばらしい近代建築で、駅前には大広場があり、ここを中心に四方に広い舗装道路が延びて、路面電車や自動車が頻繁に通る、その両側には街路樹が植えられて美しかった。大連市は日本人が多く住んでいて、戦争中の影響を感じさせない落ち着いた街並みだった。在留の日本人にはそれぞれ県人会があり、収容所にもそれぞれの県の出身者を訪ねて来て、衣類、食糧、寝具類をたくさん届けてくれた。日本が戦争に負けたとはいえ、祖国に帰るといふ思いは一致していた。このような有り難い恩恵に支えられながら、私たちの大連避難民収容所におけ

る集団生活が始まった。収容所に入った夜はとても美しい星空で、身近に迫ってくるような北斗七星や北極星を、二階の窓から眺めたことが忘れられない。

各教室に約二十五人ずつ部落ごとに別れて入室、宮城屯は二階の東端の二教室が割り当てられた。間に小部屋があったが、ここは病人が出たときに病室として使われた。東端の階段の所には、大きな鉄鍋が据え付けられていた。この実業学校は、終戦まで日本陸軍の仮兵舎として使用されていて、かなり大がかりな炊事施設があったとのこと、この大鍋もそこで使っていた鍋であった。避難民は大連市民から好意の差し入れを頂いたので、早速この炊事場を使って共同炊事が始まった。共同炊事と言えば、忘れられない思い出がある。鍋底にできる「お焦げ」をもらうのに、子供たちが一列に並び、順番にもらって手にしたあの香ばしい匂いが、今もって記憶に残っている。初めのうちは米のご飯も食べられたが、次第に食糧事情が悪

くなり、共同炊事を続けていくことができなくなつて、そのうちに個人ごとの炊事に移行することになった。

入所と同時に、本部の指示によつて「肥やし汲み」「港湾での荷物の積卸し」などの荷役作業や「ソ連家庭の雑役」やら「商店の手伝い」などに従事することになつていた。それぞれの仕事を真面目に働いていたが、そのうちに生活形態が個人生活に変わると共に、仕事も自分たちで探して働くようになった。避難を始めてから学校に通うことはなかつたし、勉強をする機会も意欲も持てなかつた。それよりも、生活のためには子供たちも働かなければならなかつた。私も現金収入を得るため、最初は母と一緒に働いた。ソ連家庭の窓ふきや床磨きの仕事もしたが、賃金が安いのでやめ、サツマイモと少量の小麦粉を混ぜて作った「かんころ餅」と落花生を売る商売を始めた。朝早く市場で仕入れ収容所の門前で商つたが、午前中でほとんど売れるのでとても面白かつた。父は

収容所の守衛の手伝いをしていたし、母はソ連軍や中国軍の兵舎の洗濯をして、帰りには石けんや化粧品を売っていた。個人生活の炊事になるころから「粟^{アワ}」と「高粱」が主食となり、子供たちは毎日石段の上で水を掛けながら精白する仕事を手伝っていた。友だちが集まつては、ゴシゴシともみながら祖国日本に帰る夢を語り合つたものだ。

この収容所で困つたことは、「虱」から感染する「発疹チフス」という伝染病が流行したことだ。虱退治の方法としては、人間が獲ることと、月に一度派遣されるソ連軍の蒸気自動車によつて、衣類や寝具などを熱消毒してもらうことだつたが、いずれも全滅させることはなはだ困難だつた。私も「発疹チフス」に罹つたが、病状は軽くて、昼近くになると熱が出て手足が電流を流したようにしびれてだるくなる。一人で布団を敷いて横になり養生していたが、一週間ぐらいで症状は回復に向かつた。飢えと寒さと栄養失調などで、この伝染病に罹つた弥栄村の仲間の人たちは、引揚船に

乗るまでの間に二百余人の犠牲者を出し、收容所前の山に葬り弔われた。

さらにもう一つ、忘れられないのが、「〇月〇日、日本に帰れる！」というデマが広まったことだ。何回もそのうわさを信じ大喜びして準備をしていたが、しかしその日がくると一時の喜びもションボリとなつてしまった。このようなことが何回か繰り返されるうちに、やつと待ちに待った日がきた。

待ちに待ったその日は、昭和二十一年十月下旬だったと思う。その日の朝、弥栄本部から正式に「引揚命令」の通達があり、大連港の埠頭へ移動することになった。全員荷物を整理し、若干の食糧を準備して、約一年間暮らした大連実業学校に別れを告げた。ここで肉親を失った人々は、遺体を埋葬した山々などに足を運び、心を込めてお香を焚き冥福を祈ったが、その煙がどんよりと曇った空の中へ静かに昇っていく悲しい別れだった。

五 大連埠頭の暮らし

午後六時ごろ、ソ連軍のトラックで大連埠頭の倉庫へ移動させられた。もうすぐ日本に帰れる！祖国日本へ一歩近づいた喜びは、何物にも代えることはできなかった。興奮して、この夜はなかなか眠れなかったが、コンクリートの床に敷いた筵の寝床でも温かく感じられた。当時の大連港は、第一から第二、第三、第四埠頭まであり、一万トン級の船も楽に接岸できる設備の大きな港であった。毎日、魚を釣ったりクラゲを岸壁に引き上げて遊んでいた。そんな遊びの中でも最も楽しかったのは、労働組合の人たちが、紙芝居や読み聞かせ童話や面白いゲームなどをしてくれることだった。その上にリンゴなどのお土産もあるので、楽しみにしていたものだ。場所は、埠頭の倉庫の屋上だった。そのとき教えられた歌に、革命歌「赤旗の歌」がある。

民衆の旗 赤旗は 戦死のかげね

つつむ

しかばね固く冷えぬまに 血潮は

旗を染めぬ

(以下、略)

私自身、歌の意味をよく分かっていないのに、毎日毎日聞いていたので自然に覚え、歌うようになっていた。二週間くらい過ぎたある日の午後十時ころ、ちようど消毒のために風呂に入る順番がきたので、宮城屯の人たちと共に海岸を歩いていときだった。珍しく、アメリカ合衆国の旗を立てた船が入港してくるのを見つけた。いよいよ祖国日本へ帰る日の近いことを感じた。

六 大連港から祖国日本へ

埠頭に移動してからおよそ一カ月が過ぎたころ、防波堤の向こうから大きな貨物船が二隻、ゆっくり入港してきた。ちようど昼食時だったので、パンを持ったまま海岸へ走った。みるみるうちに、海岸や建物の屋上は引揚者でいっぱいになっていった。よく見ると、日本人船員が帽子や手ぬぐいを振りながら何かを叫んでいる。待ちに待った引揚船が、ようやく来たのだと実感が湧いた。この夜

は、まさにお祭り前夜そのもので、帰国の荷物整理にも力の入る楽しい夜であった。

昭和二十一年十一月二十八日午後二時ころだったと思う。いよいよ乗船だ！ 胸をドキドキさせながら各人で荷物を背負い、ソ連軍高官の立ち並ぶ前を、丁寧な礼をしながら一列になって進む。あの船の階段を一段一段登るのだと思うと足が震えていた！ そして一步船内に踏み込んだときには、「本当に乗ったのだ、乗れたのだ」という感激で、涙が自然に流れてきた。まさに「さらば弥栄よ……」そのものであった。

私たちの船は、「永徳丸」という貨物船を改装した六千トン級の船だったと思う。夕方から空は曇り、弥栄村を避難するときのような天気だった。西の空がわずかに染まるころ、出船の合図……！ 忘れられない瞬間であった。船は、大連港の岸壁を静かに離れる。大連市の夜景がこんなにも美しいものであったのか、目を疑うくらい眺めているうちに、次第に遠く霞んでいく。だからともな

く「さらば弥栄よ」の歌が流れて、まさに「さらば弥栄よ」の実感が胸に込み上げてくるのであった。

さらば弥栄よ

一 さらば弥栄よ 黒土踏んで

北満州に 御稜威みいの光

銃と鋏いとに生命をかけて
ぐつとにらんだ 北の空

二 さらば弥栄よ 十有余年

稔り豊かな 楽土の春を

捧げつくして 祖国みくにのために

ああ血涙に ほほえむ大地

三 さらば弥栄よ 恨みは深し

戦さ敗れて 空しき山河

いなく愛馬よ いとしの土を

今日ぞ捨てゆく 悲しき別れ

四 さらば弥栄よ また来るまでは

しばし別れだ 春来るまでは

北斗またたく 大空ながめ

大和男児が 誓うのだ

この歌は「ラバウル小唄」の節で歌えるもので、徳島県上坂町出身故新見勢市先生が作詞したものである。收容所での集団生活を、より強く、より正しく、より生きる力を付けようという願いから作詞された、すばらしい歌だった。

七 大連から佐世保へ

引揚船二隻は、黄海の荒波を乗り越えて進む。ときどき、もう一隻の船の姿が波間に消えるほどの高波が襲ってくる。私たちが子供は甲板の上で船酔いもせず目を凝らし、ただただはるか祖国を想像しながら見つめていた。航海は、約一週間掛かったように思う。船内での食事は、精白していない大麦だけのご飯だったが、みんなでゆっくりゆつくりよく噛みながら、おいしく頂いた。副食のことは記憶にないが、麦だけのご飯がどうしても

忘れられない。

そして朝目が覚めて、いつものように甲板に行ってみると、ものすごい濃霧で周囲がよく見えなかったが、なぜか船は止まっていた。朝日が昇り、辺りの霧が少しずつ晴れてくると、島々の姿や広大な港が見えてきた。あの、夢にまで見た祖国日本に着いていたのだった。上陸用の蒸気船に乗り移り進んで行くと、船の両側には大小様々、無数の真つ白なクラゲが、私たち引揚者を迎えてくれた。私たち引揚者を歓迎してくれた、純白のクラゲたちよ！ ありがとう！

上陸すると、直ちに白衣に身を固めた係の人からDDTとかいう消毒薬で頭、両手首、背中はいうに及ばず、ベルトを緩め腹部まで念入りな大歓迎を受けた。とにもかくにも、祖国日本へたどり着くことができた喜びでいっぱいであった。上陸して旧海軍の兵舎に案内され、最初に頂いた「雑炊」の味は一生忘れることができない。

引揚の後、父の実家に落ち着き、生活をするこ

とになったが、私は学校教職の道を進み長年勤め、最後は岩手県で定年退職を迎え、現在は社会教育関係のお手伝いをしている。終わりに、弥栄の物故者五百六十九人の皆様の御冥福をお祈り申し上げて、ペンを置かせて頂く。